

- イザヤ書第5章は全体のイントロの最後となる。イントロの中で最も厳しい内容となっている。
  - 3つの部分：(1) 5:1-6 ぶどう畑、(2)5:7-24 ぶどう畑の説明、(3)5:35-30 結論
- 5:1-6 ぶどう畑
  - 実がなるまでに相当な時間がかかる。かなりの準備とケアが必要。3年目にしようやく実りを享受できる。
  - しかし期待していたようにはならなかった。そこで「垣を取り払い、荒れすたれるに任せ…」(5節)、荒れ放題となる。
- 5:7-24 ぶどう畑の説明
  - 7節:このぶどう畑はイスラエルのことである(cf Luke 20:9-19)。
    - ◇ 「公正」(mispat)と「流血」(mispah)、「正義」(sedaqah)と「悲鳴」(seaqah)。
      - 本来求められているものと現実を比較する。
  - 5つの「わざわざ」なる行為と態度：(「わざわざいだ」で始まる)→「わざわざいだ」は葬儀に関係する言葉。
    - ◇ 貪欲(8-10節)、我儘さ(11-17節)、皮肉さ(18-19節)、不道徳(20-21節)、社会的な不義(22-24節)。
    - ◇ 貪欲→大きな家、土地の搾取。聖書の中の「土地」の概念について(主のもの、Lev 25:23-24)。
      - 結果→9-10節。土地は荒れ、奪われ、何の結果も出ない→捕囚の預言だろうか。
    - ◇ 我儘なライフスタイル→神さまは快楽を否定するのではなく(cf. Isa 25:6; Rev 19:7-9)、それに対する態度を問われる。あたかも享受することだけが重要なように生きるスタイルは聖書的ではない。最も大切なこと＝「主のなさること」に目を留めること(5:12)。裕福な人々に対する言葉(13-16節)。この人たちの食卓を豊かにしていた「子羊」が廃墟で食をとるようになる(17節)というアイロニー。
    - ◇ 皮肉→人々の考え方・態度を表す。神さまに対するチャレンジ(18-19節)。「嘘を綱として咎を引き寄せる者」→罪に喜びを覚える人たちのことか。神を神として畏れることのない歩み方を示す。
    - ◇ 不道徳→罪を罪として認識しない人たち、善悪の基準が曖昧となる生活を指す。自己判断に全てが委ねられている姿が描かれ、もはや自らの「自由」を強調せず、一步踏み込んで善悪の権威に反逆する。
    - ◇ 社会的な不義→最も重要なことではない事柄には一生懸命なのに、最も重要な事柄(正義)に疎い。沈黙。「万軍の主のおしえ」「聖なる方のことば」を蔑ろにする人々(24節)。結果→刈り株、枯れ草。
- 5:25-30 結論
  - 主の裁きの手がくだる。自然界も人類の歴史も主が支配される。大国を用いてイスラエルが崩壊する。5:25の言葉は後に9:8-10:4でも繰り返される。大国は自らの戦略のために攻め入るが、これも主の「器」として用いられるという。主との契約を破る者たちが直面する当然の結果がこのような形で現れるという。神さまの恵みは罪の力に飲み込まれてしまうのか?
  - 我々は神さまによって創られたもの。神さまが権利をもっておられる。神の作品である(Jer 18)。実りを求められるのは当然である。その作品をどうするかは権利は神ご自身にある。もし創造者がおられるのであれば、その方が示される道を歩むことを求められるのではないか。創世記2-3章 vs. 12-50章。
  - 上記の問いへの答えは、「Big NO!」主イエスさまが神さまからの答えである。神さまご自身が成し遂げた。
    - ◇ ヨハネの福音書15章 このお方に連なっていれば豊かに実を結ぶ。それが神さまの栄光を表す。
  - 我々が他の人とのように接するかがとても重要である。それが神と私の関係の実態を示している。神さまが成し遂げてくださったことを最も反映するのは、我々と隣人との関係の中である。
- 動画“The Blessing” <https://www.youtube.com/watch?v=8EPcd0B5SNs&t=131s> イエスさまを通して示される神さまの我々への愛、罪の赦し、恵み、祝福を、我々も世界に伝え分かち合っていきたい。